
無気力伝説

やかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無気力伝説

【Nコード】

N5965Y

【作者名】

やかん

【あらすじ】

強いくせにやる気のない3人組の軍人になるための学園生活が始まる。(ゆっくり更新です)

主人公その1その2

「……………」

長い廊下に男が一人歩いている。友人との会話を楽しんでいた、他の生徒達が黙りこむ。

長身で金色の髪をなびかせ、眼鏡をかけたその男の名はユキア。オイネウス学院の軍事科1年で数少ないSランクを持つ生徒だ。

底のない魔力を持っている南大陸からの者であるということと他の多くの生徒から一線を引かれているが、騒がしいのは好まないの。本人はこの状況に満足している。

「ユキアー」

名前を呼ばれ振り返ると、そこにいたのは赤髪の男。前髪をピンで止め、ヘッドホンを首に下げている。名をヒコという。彼は中央大陸の出身ではあるが、ユキアとは仲が良い。彼も同様にSランクを持っている。

「どうした？」

「んにゃ、特に用はないけど。教室出たらユキアが見えたから」

「ああ、そう」

オイネウス学院は生徒一人ひとりをランク分けする。最も高いランクがS。その次にA・B・C・E・Zと続く。Sランクは1学年に10人ほどしかおらず4学年合わせても50人に満たない。

クラス分けはランクごとではなくコンピュータによって自動で振り分けられる。軍事科は1学年5クラスあり、一クラス30人前後。オイネウス学院は普通科もあるが人数は圧倒的に軍事科が多い。

クラスの中で生徒のランクが違ふことで問題が起こることは少ない。自分より低いランクの生徒を見下した、いじめのようなものが存在することは生徒含め学院側も知っているが実力主義なため大きな事件等が起きなければ誰も動かない。

「そういえば、今日モギ見てないんだよね。学校きてんのかな？」

「さあな。僕もヒコもクラス違うから会わなくても仕方ないんじゃないか」

「んーうん、そだね。」

ユキア、ヒコ、それに今はいないがモギは全員がSランクとなっているため、同じクラスになれる確率は非常に低い。少人数しかないため仕方のないことなのだ。

会話が少し途切れた後、ユキアが何かを思い出したように声を上げた。

「ああ。そういえば、この前言ってた移転魔法使えそうだ」

「え、あれ普通は使えないんじゃないの？」

魔法には形式魔法（Магия стили）と無形式魔法（Стиль без магии）がある。簡単にいえば魔法書に書かれているのが形式魔法。使用者がオリジナルに創りだすのが無形式魔法である。無形式魔法には多くのリスクがあるためあまり使用されない。移転魔法は形式魔法だが無形式魔法と同じようにあまり使用されていない。非常に高度な魔法で魔法式を理解するのが難しいというのが使用されない一番の理由だ。

「魔力量が無駄に多いからね。何度でも練習できるんだよ」

「なるほど。meにはできない芸当だね。途中で絶対飽きるよ。もう無理って投げ出す」

「僕だって飽きるのは一緒。ただ、移転魔法が使えれば後で楽しめるだろ」

「ユキアらしい理由だね。で、その魔法を使えるゆーこおーはんいは？」

ヒコは言葉を噛みかけたがなんとか言い切る。そんなヒコにユキアは苦笑しつつ答えた。

「基本的にどこでも行けると思う。練習したときは自分の部屋から Центр Светаまで行き来したけど、失敗しなかった。地名が付いているところなら行けるんじゃないか。まあ、確実なのは僕が行ったことのある場所。あ、だけど聖域とかは絶対行けない。」

はじかれるらしい」

Центр Светаというのはユキアの故郷の名前だ。同じ言葉を話す中央と南だが、一部方言のような違いがある。Центр Светаは南の方言で光の中心という意味だ。

「なんか難しい……聞いてたら頭痛くなってきた」

「ばーか」

「うわぁ、ひどく。me涙でそう」

「でなくせに何言ってるんだ」

「痛っ。ちょ、何でもかんでも暴力に訴えるのやめようよ!!」

ユキアがヒコの頬を引っ張る。

「はっ。どうして僕がお前の言うことを聞かないといけないんだ？」

嘲笑を浮かべながらヒコを見下ろすユキア。10センチほど違いがあるためにヒコは完全に見下ろされている。

「くそっ。身長差が恨めしい……!!」

主人公その1その2（後書き）

初の長編小説。

楽しんでいただけたら幸いです。

主人公その3

「モギ」

戦闘を主としない普通科の生徒が使用している棟の図書室で一人読書をしていた生徒をヒコが呼んだ。ユキアは黙ったままヒコの後ろに立っている。

周りにいるのはほとんどが普通科の生徒のため3人は浮いていた。普通科は制服の着用が義務とされているが、軍事科は校則が緩いため自由な格好をしているというのも浮く原因の1つだろう。

モギと呼ばれた生徒は、ジャージ姿だが首のあたりから学校指定のワイシャツの襟が見えているので下に制服を着ているものと思われる。

パツと見はつきり言っつて男にしか見えないが、女だ。もう一度言う。女だ。

「何？」

1つにくぐられた黒の強い濃紺の髪に、深い海色の瞳。どちらも太陽の光が反射することでもなんとも言えない美しさが出ている。

「飯にしょ？」

「ん」

短い返事を了解ということだと判断したヒコはユキアと図書室を出た。

「ていうかさ、さっきまで授業だったよね」

ヒコがふと浮かんだ質問をユキアにする。

「そうだな」

「どうして図書館にいるん？」

「サボりだろ」

「やっぱり？」

「ああ。どうせ家で家庭教師から教えてもらったことだったんだろ。一回習ったこと何回も教えられるのって面倒だから」

モギの家は貴族制があった頃、上流貴族だった。その中でも財力や発言力は高く、今でも経済的地位が高い。一族に生まれたものは幼少の頃より英才教育を受ける。

つまりモギにとって、オイネウス学院での授業の多くは一度学習したことの復習なのだ。

進級に必要な単位だけをとれば、あとは何の問題もない。数少ないSランクも持っている。モギは学力も戦闘能力も十分にあるということだ。

「待たせてごめん」

本を片脇に抱えたモギが図書室から出てくる。

「んにゃ、問題ないよ」

いじっていたヘッドフォンのコードから手を離しヒコが答える。

「何の本借りたん？」

抱えられている本を指さしながらユキアが問う。

「推理小説とか」

「へえ。面白かったら今度教えて」

「了解」

3人は似ている部分も多いが正反対の部分も持ち合わせている。周りからすれば、アンバランスな3人組だろう。だが、3人は絶妙なバランスで関係を保っているのだ。もともと仲が良かったわけではない。特に入学したばかりの時は、モギとユキアは仲が悪かったと言ってもいい。

入学してから3ヶ月ほど。会話が噛み合わないことは多々あるが、3人は仲良くやっている。

— — — — —
— — — — —
ユキア↓ユ ヒコ↓ヒ モギ↓モ

ユ「じー」

ヒ「何見てるのーって普通科の子じゃん」

ユ「いや、スカートの中見えそうで見えないなーとか思っ」

モ「天誅」

ユ「痛っ、え僕なんかした？」

ヒ「自分の発言を振り返ってみようね？」

ユ「自分の発言？……風が吹いてスカート抑えるくらいなら短いスカート穿くんじゃねえって？あれ、違うか」

モ「……………」

ヒ「そこを動くなよ、ユキア」

ユ「ちよ、それは痛いからやめようね？ライフルって重量ハンパねえよ」

ヒ「てんちゅー」

ユ「ぐっ……………」↑片膝をついた

モ「容赦ねえ」

ヒ「ユキアが悪い」

モ「まあ、確かにな」

ユキア「……………（微妙に見えない、か）」

ユル「なあにしてんの？ユキア」

ユキア「んあ？ああ、ユルか。スカートがなー」

ユル「スカート？それがどうしたのん？」

ユキア「抑えるくらいなら短いスカート穿くんじゃねえよって思っ
てさ」

ユル「ユキアって意外と……」

ユキア「お前も男だったら一度くらい考えたことあるだろ？僕は思
ったことを口にしただけだ」

ユル「私は男じゃないわよ、この変態っ！」

ユキア「はあ？お前は男だろっ」

ユル「痛っ。もうっ暴力反対！」

ユキア「オカマ反対」

二人「……………」

「……………」

主人公その3（後書き）

ユキアは変態ではないです。でも年頃の男の子なので勘弁してやってください（笑）

会話文のみの中の最後に出てきたユルはそのうち本文にも登場すると思います。

奇妙な出会い（前書き）

時間軸無視。

ユキア視点です。

奇妙な出会い

「ねー、なまえなんていうのー？」

……。

「むししないでー」

……………。

「なんでへんなかつこうしてるのー？」

……………。

「いっしょにあそぼうよー」

ナンパかつ！？という僕のツツコミは受け入れてもらえるのだろうか。

檻に入った幼い子供相手に。

どうしてこうなったのか振り返ってみることにしよう。

僕は学院に行くのが面倒で、今日はサボることにして街に来ていた。いつもの真っ黒な格好では目立つだろうと思い、中央大陸の人間の格好をして目的もなくだらだらと過ごしていた。ここまでは何の問題もなかった。

次に昼飯を食べるために店を探した。簡単に食べられるものをもと思いサラダを食べた。バランスが悪いのは分かっているが、肉が苦手なので仕方ない。焼き魚は好きだが食べるのに時間がかかるからやめた。

ここまでも問題はなかったはずだ。

半日歩き続けたために疲れきった僕は細い路地に入り休憩していた。ああ、そうか。この時路地に入ったのが間違いだっただ。

「軍人がここを嗅ぎつけたようだ。10分以内にはここに来るぞ。どうする？」

「ちっ。仕方ない、今日はずらかるぞ。軍人なんか捕まったら元

も子もねえ」

「コイツはどうするんだ？ 顔を見られちまってるし……始末するしかないか」

「ほっとけ。コイツに顔を見られたくらいなんでもない。どうせ俺達は見つからないしな」

どう聞いたって怪しい会話が聞こえてきて、僕は見つからないように隠れた。2人の会話が聞こえなくなり、2人の気配がなくなったのを確かめてから立ち上がり2人が立っていた場所に行ってみた。で、冒頭に戻る。檻と言っても地上に置いてあったわけではなく、地下に埋め込まれているタイプの物だったから子供の声は下から聞こえてきた。人通りの少ない道とはいえ、こんな所に檻なんか作るなよと少し思った。気配を感じた時、3人分だったのに見たときには2人しかいなかった変だとは思っていたし、男2人が会話の中で近くに誰もいないのに「コイツ」と言っていたのにも違和感があった。

格子状になった地面から白い手が出てきて、ナンパかと突っ込みたくなるような声が聞こえてきたのだ。

「あー、悪いな。無視したのはわざとじゃない。僕の名前はユキアだ。変な格好って言われてもそうだなとしかいいようがない。僕も変だと思っているからな。お前の名前は？」

しゃがみ込んで子供に声をかけてみる。

「われか？ われのなまえはマナだよー」

一人称が「我」ってどういう教育されてきたんだろ。マナって女の名前か？

「女……女の子？ 男の子？」

女か？ と聞くには幼いと思って言い直した。

「おんなー！」

「そうか。なあマナ、ここから出たいか？」

僕の一言にマナはそれまで浮かべていた笑顔を消して、無表情に

なった。

「でたいよー。だけどーだめなの。われがでたらユキアがけがしちゃうよ」

「なんで怪我するんだ？」

「んー、だめなものはだめなの。われのせいではうえは……きつとユキアも……」

「心配するな。僕は自分で言うのはなんだが、強いからな」

「ほんとう？」

首をかしげるマナに「本当だよ」と言った。いつもなら無視するだろうが、何故か今回はそうしなかった。助けたほうがいいと、直感的に思ったのだ。

「たすけて、ユキア」

「りょーかい」

「『баpьe』」

まずは、マナの周りに結界を張る。檻を壊したときにマナを巻き込むわけにはいかない。

「『перeь』」

結界を壊さない程度に魔法で檻に破壊系の魔法をかける。

ガシャン。大きな音をたてて檻が外れた。

「結構脆いな」

一度の攻撃で壊せる檻に入れておいてどうするつもりだったのだろう。

まあ、軍人が来たくらいで置いて逃げるんだ。そんなに重要なモノではなかったのだろう。

「マナ、出てこいよ。大きい音出しちまったから人が来る。その前にここを離れるぞ」

「おー!!」

タンッ。軽い跳躍でマナが外へ出てくる。

あれ？そんなジャンプ1つで出てこれるほどこの檻は浅かったか？

「すごいジャンプだな」

「もっとほめてー」

「すごいすごい（棒読み）」

「えへへ。あのねーははうえがー、われのちようやくりよくはばけものじみてるっていったよー」

棒読みだったはずだがマナには通用しなかった。子供は純粹だな。嗚呼、恐ろしい。

つか、子供に化物じみてるっていう親ってどうなんだ？

「なあ、マナは母さんのこと好きか？」

「もちのろんだよー。われは、ははうえがだいすき！」

まあ、親子の形はそれぞれ、か。

一緒に走っても良かったが、そうすると速度をあまり上げられないから僕はマナを背負った。

「う……うあ……」

正直言ってキツイ。体力は残念な感じくらいにしかない。あと2分走り続けられたら自画自賛しよう。ああ、そうしよう。

「よく、やったよ、僕」

「あははははーユキアすごい。びゅーんてはしてっ！ははうえよりもはやーい」

「そ、りゃ……どーも……」

「でも、どうしてまほうをつかわなかったのー？」

「息、整える、から……ちょい待って……」

「マナ、まってるー。ゆっくりでいいよー」

「、さんきゅ……」

呼吸を整えた僕は水分を欲して店を探した。

ちなみにマナには出店で売っていた服に着替えさせた。檻の中にただけあってお世辞にも綺麗とは言えなかったからだ。髪の毛も軽く洗わせた。マナの髪の毛は灰色で、肩まである。一本一本がとても細く、とても丁寧に手入れされてきたことがうかがえた。

「飛行魔法は使えないこともないんだけどな。この街は道が入り組んで安全に飛べるか分からなかったからやめた」

「へー。おとなはたいへんなんだねー。いろんなことかんがえてこうどうしないとだから」

本当にマナは子供なんだろうか。発言が大人びている気がする。

「で、聞きたいことがあるんだけどいいか？」

「ばっちこーい！」

「……………」

テンション高くね？

少し高くつくが、個室のある店に入った。厄介ごとに巻き込まれている気がしてならないからだ。

一応、無形式魔法で盗聴されないように結界も張っておいた。用心に越したことはない。

「まず、マナはこの国出身？」

「うまれたところのことだよねえ。トウワのくにだよー」

トウワってたしか聖域にいる神官の一族が住んでる秘境の地じゃなかったか？

「もしかしてお前、額に刺青がないか？」

「あるよー」

マナが額を隠すように伸びていた前髪を上げると予想通り、刺青があった。

それはトウワの国の人間である証。神官になることを決められた人間である証。

「じゃあ、次な。どうして檻の中にいたのか教えてくれ。僕が助け

る前にお前の近くにいた男達と関係あることか？」

「じゅんばんにはなしていくね。えっと、アローンさまにあうためにははうえとこのたいりくにくにきたの。でも、とちゅうでちからがぼうそうしちゃった」

アローン……中央軍元帥にして聖域の最高管理者。

「マナの力が、暴走したってことか？」

「うん。しんいきをまもるためのちからなんだけどね」

しんいき……ああ、神域か。聖域の最奥にあるって言われてる祭壇だな。

「マナの母さんはそのときに死んだってことか」

マナは小さく頷いた。

「つかまったのは、ひとりであるいてたときだよ」

「んー……それはマナがトウワの国の人間だから捕まえたわけじゃなさそうだ。最近よく聞く子供をさらって売るのを仕事にしてる奴らだな」

だから、軍人に場所を嗅ぎつけられたくらいでは置いて逃げた。もし、トウワの国の子供だと知っていたら何としてでも連れていったはずだ。珍しい商品は高く売れるのが当たり前のことだからな。この後もいくつか質問を続けた。マナはそのほとんどに答えた。言葉自体は舌足らずな感じがするが、内容はしっかりしていた。

「さっきから気になってたんだけどさ、僕の言ってること全部理解してる？」

「うん。いちおうだけどわかってるよー」

……頭いいね。

「さて、今からどうする？」

「どうしようかなー」

人事みたいに言うなよな……。。

奇妙な出会い（後書き）

書きたいことはたくさんあるのに上手く書けません。

頑張りたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5965y/>

無気力伝説

2011年12月2日17時47分発行